

■旅行者動向2011 最新刊

最新の旅行の実態や旅行者の意識に関する全国アンケート調査結果を、当財団独自の切り口で分析、グラフや図表を多用して分かりやすく解説。
二〇一一年十一月発行



■観光実践講座講義録 最新刊

「なぐつながる」が生む地域の新しい魅力

～高校生レストランのまち多気町に学ぶ～

毎年十一月に実施している二日間の講座講義録。二十三年度は初めて東京を離れて三重県多気町で開催。講師は多気町まちの宝創造特命監・岸川政之氏、三重県立相可高等学校食物調理科教諭・村林新吾氏、観光カリスマ、人間牧場主・年輪塾塾長、若松進氏、農業法人有限会社せいの里まめや代表取締役・北川静子氏、鳥取県境港市観光協会会長・榊田知身氏ほか。二〇一二年三月発行。



■地域の「とがった」に学ぶ
インバウンド推進のツボ②

昨年発行の『地域の「とがった」に学ぶインバウンド推進のツボ』の続編。今回は主に資源の見つけ方や生かし方に関する「とがった」を中心に取り上げています。
二〇一二年五月発行。



■訪れるに値する価値を自ら創る

～今求められる「ソフトデザイン」発想

当財団主催「第二十一回旅行動向シンポジウム」採録集。シンポジウムでは、「インスパーク長期滞在の旅」という三日間一カ所滞在型の旅行商品を成功させた(株)ワールド航空サービス・菊岡潤吾社長、日本にキャンオニツグという自然を生かした新しいアクティビティを導入した(株)キャンオニツグなどの事例から見えてくる時代の読み方、価値創造の知恵や発想の方法について、マーケティングコンサルタントの谷口正和氏に解説していただきました。重要なのは観光に関わる一人ひとりが人生という「時間」にもっとと敏感になり旅を通してすてきな時間の過ごし方や生き方を提示し、訪れるに値する価値を創り出す「ソフトデザイン」発想です。二〇一二年六月発行。



※当財団出版物の「注」文はホームページからお問い合わせください。
担当:公益財団法人日本交通公社 観光文化事業部

電話 03-5255-6076 http://www.jtb.or.jp

次号予告

●観光地におけるまちづくりの本質は何か? 観光まちづくりの成果は観光客数だけでは測れません。観光まちづくり・その「心」を探る。次号特集は、観光まちづくりを実践し成果を上げている地域の事例を紹介し、地域が自ら考え、行動する自立した観光地へと構造を変えていく原動力の重要性について探ります。

研究調査だより

●ハワイでは、昨年二〇一二年における来島者数が前年比で三・八%の増加、来島者の総消費額は二五・六%の増加となりました。景気動向や為替相場などに左右される数字とはいえ、時期の低迷期から再び成長路線へと転換したハワイの観光からは改めて学ぶ点が多くあるように思います。

●当財団では、例年一人から二人の研究員をハワイ大学が主催する二週間の夏季短期プログラム「Executive Development Institute for Tourism (EDIT)」に派遣しています。この研修は、観光人材育成を目的として行われるもので、主にアジア太平洋地域で観光に携わる行政官や民間事業者が参加しています。

●研修では、マーケティングや商品開発、観光政策など多岐にわたるテーマについて、行政担当者や民間事業者など実際にハワイの観光の最前線に立つ講師陣から直接学ぶことができます。実際の観光地にまわった期間滞在の参加者にとっても大変貴重なものです。また、さまざまな国から参加者が集い議論を行うことは、改めて自国の観光を客観的に見直す機会にもなるのではないかと期待しています。

●そして今年の参加者は私。積極的に耳聞きし議論をして、今後の研究活動に生かせる成果を持ち帰りたいと思います。(中島)

【当財団からのお知らせ】

本誌は次号より、これまでの隔月での発行から一月、四月、七月、十月(発行日は原則十日)の年四回の季刊となり、特集を取り上げるテーマを当財団の活動や研究調査とリンクさせた企画にしていきたいです。当財団各部の活動や旅の図書館の情報なども掲載して、私とも公益財団法人としての事業活動へのご理解をより一層深めていただけるコンテンツづくりを目指します。

編集後記

◆小笠原諸島が昨年六月末にユネスコ世界自然遺産に登録されてから一年が経過した。当財団が小笠原における観光の調査研究活動を始めておまよ十五になる。これまでに研究員が何度か現地へ赴き、島民の皆さまや島外の関係者の皆さまと議論を重ねて、小笠原にふさわしい観光を共に考えてきた。

◆ステークホルダーである行政研究者、事業者、住民そしてビジターの立場から小笠原の魅力を表していただいた。小笠原をこよなく愛する人々は、登録される前も後も、生活として研究の場である小笠原本来の自然をどう守れるかを考え、話し合い、実行に移して活動している。

◆観光から派生する経済的な活動は小笠原で生活する人々にとって大切な役割を果たしている。小笠原を愛している人々がそれぞれの立場から小笠原の魅力を伝えていく活動のものになることは何かをひもとくとき、これからの小笠原の観光がどうなればいいのかを表してくれた。残念ながら島への土産の経験はないが、原稿を通して小笠原がどのように素晴らしいかを知ることができた。執筆者の皆さまの思いと展望を共有しながら、持続可能な観光の在り方をこれからも考えていきたい。(片桐)